

猛禽類調査

効率的かつ正確なデータ収集と
最新の知見に基づく行動圏などの解析を行います



当社では、既存資料調査や適切かつ効率的な現地調査により、猛禽類の生息状況、行動圏(内部構造の把握)、営巣状況などについて十分に把握するとともに、周辺の地形や植生、餌生物などの状況を把握することで、生態系における上位性の注目種としての定量的な影響予測評価を行っております。また、予測結果を基に、既存事例も参考にしながら、猛禽類の生息、繁殖への影響を最小限にするための適切かつ効果的な保全対策の策定についてもお手伝いいたします。

▶ 猛禽類調査の概要

猛禽類は普通1日のほとんどを木などにとまって過ごし、狩りや狩り場への移動、繁殖行動のために飛翔する場合もその時間はごく短いものです。行動圏が広いこともあり、観察できる頻度は一般に高くありません。繁殖行動を秋から始め、半年以上を費やし、営巣・産卵から子育てまでする種もあります。このような猛禽類の行動特性から、一般鳥類で用いられるラインセンサス法では猛禽類の生息を把握することは困難であり、猛禽類に特化した定点調査法などの調査方法を採用する事が必要です。猛禽類調査は何を把握するかによって大まかに4つの内容に大別できます。



生息状況調査

【生息状況調査】

対象地域における猛禽類生息の有無と繁殖可能性を把握し、行動圏調査等の必要性を判断するために実施します

【行動圏調査】

対象地域で営巣・繁殖する、または繁殖可能性の高い猛禽類の行動圏を解析し、行動圏の利用状況など内部構造を把握するために実施します

【渡り調査】

対象地域を渡り経路として利用する猛禽類の種類や個体数、時期など渡りの状況を把握するために実施します

【営巣状況調査】

対象地域で営巣・繁殖している猛禽類の、営巣地・巣の状況、繁殖ステージ(産卵、孵化、巣立ち等の時期)、餌動物の把握をするために実施します



クマタカ(亜成鳥)



渡りをするサシバの群れ

▶ 猛禽類調査の手法

現地調査は、双眼鏡や望遠鏡、コリメート方式撮影機器（望遠鏡にカメラやビデオカメラを装着し超高倍率で撮影する方式）を併用し実施します。また、レーダーシステムやレーザー測遠システムを利用し、飛翔状況の正確な把握も可能です。

① 定点調査法

調査範囲の視界が良い場所を定点として設定し、同じ場所で調査をします。

生息状況調査、行動圏調査等では通常1回あたり連続した3日間を毎月、複数年実施します。繁殖期には月2回実施することもあります。

渡り調査は、秋季と春季に実施します。調査地域や対象種によって時期や期間は異なります。

調査範囲内に調査定点を複数設置し、無線機等で連絡を取りながら同時に実施することで精度の高い調査を実施します。

② 営巣に関する調査手法

定点調査による行動圏調査等によって得られた情報を基に、踏査によって営巣場所を特定します。抱卵期や産卵直後など繁殖初期は、外部からの刺激に敏感と言われていることから、踏査する時期は慎重に判断する必要があります。

営巣場所が特定された後、必要に応じてビデオカメラなどを利用し、繁殖の推移や運ばれてくる餌の種類など巣内の状況を観察することもあります。

③ 最新技術を用いた調査手法

当社では、レーダーシステムやレーザー測遠システムを用いて鳥類の飛翔位置や飛翔速度を正確に観測する方法を確立しています。



定点調査機材
左から 7倍双眼鏡、20~60倍望遠鏡、コリメート方式撮影機材



ヒナに給餌するオオタカの親鳥



レーダーシステムによる行動調査

▶ 猛禽類調査結果の整理解析

現地調査によって得た情報から、「猛禽類保護の進め方（改訂版）」（平成24年 環境省）に準拠して行動圏や高利用域、営巣中心域等の解析を行います。

地域の生態系における上位性の注目種として、調査範囲における猛禽類の各種行動や植生、地形などの状況を整理解析し、最新の知見を取り入れた定量的な影響評価を行います。



定量的整理解析

